〈名所案内〉〈旅行案内〉と文学史蹟

小関和弘

――要旨

一八七二（明治五）年、新橋横浜間に日本初の鉄道が開通した。それからさほど時を隔てずに、江戸時代の『遊覧記』『街道記』等の伝統を承けた形で、『鉄道名所案内』『鉄道旅行案内』といった諸書（本稿では〈案内記〉と称す）が次々に刊行され、以後、さまざまに形を変えながら観光案内書の山脈を形成してきた。

本稿ではそれら〈案内記〉のうち、鉄道開通直後の一八七〇年代から鉄道国有化直前の一九〇〇年頃までの書冊に記された文学関連の名所（歌枕類）・史蹟などに関する記述について検討した。観光ガイド的な〈案内記〉の記述中で伝統的文学表現―その中に最後の光芒のように漢詩への回帰も出現するのだが―と土地との関わりがどのように記述され、該地の観光地としての魅力宣揚にどのように「活用」されたか、またその「活用」法が主要幹線の整備や旅行者の量的・質的変化といった時代の推移とともにどのように変遷したかを時系列的に辿った。

本稿では〈旅行案内〉、〈名所案内〉といった旅行案内書類（以下〈案内書〉）と文学――〈案内書〉に引用される詩歌を中心に検討するに過ぎないが――との関係、言い換えれば、旅行業・観光産業によって文学形象・文学的伝統が、どのように利用及び消費、消尽されてきたかの一端を確かめるために、鉄道開通直後から一九〇〇年頃までに刊行されたものを対象とする。とは言え、検討のために〈案内書〉としてここで取り上げた諸作を厳密な外延で規定することは難しく、対象の選択にはかなり不明確なところがあることを断っておきたい。

また、日本全国各地の歌枕、名所・旧蹟と詩歌との関係等を偏りなく取り上げることは不可能で、筆者の関心が傾く東北地方の記述がやや多めになっていることをも断っておく。

江戸期『街道記』類からの継承

江戸期の『名所記』や『街道記』『遊覧記』の歴史を引きついで、鉄道の開通と若干のタイムラグをもちながら、陸続と案内記及び類書が出現する。

新橋鉄道開通（一八七二年九月）後のかなり早い時期、一八七五年に刊行された三世広重による極彩色の画を折本形式にまとめた『東海名所　改正道中記』（板元＝弘売堂山清。別名『東海名所　改正五十三駅』）が登場する。日本橋から描き起こされるが、「新橋」「品川」「川崎」「神奈川」の四図には勢いよく煙を吐く蒸気車が描かれている。コマ毎の違いはあるものの、大半の画の余白には該地の名物や名所が簡潔に記されるほか、景色についての言及もされている。「新橋」の画に「鉄道館は蒸気の乗りこみ待合すところなり　いざはつするときはたばこ二三ぶくのむまに横浜まで行くこと急用の調法なり　寅（ママ）は千里ゆく悪事千里のたとへなり」との文言が見えるように、必ずしもその場所その場所の特徴に焦点化した記述がなされているわけではない。

とは言え、「大磯」では「鴫立沢」の文字が大磯の地名と並べて記されており、「由比」には「薩捶山　むかしは峠なり」といった文言が記される。「三保の松原」への言及もあり、焼津が日本武尊伝承の地であることにも触れている（「江尻」）。また「鞠子」では伝承そのものには触れないが「千寿前」の名を挙げている。他に「石薬師」では山部赤人の古蹟の所在に触れ、「庄野」では宇治川の先陣争いで知られる佐々木高綱の名を記している。

文学や芸能との関わりについての記述は限られているが、「赤絵」とも呼ばれる本書の三代広重による開化画には新旧折衷のさまがよく描き取られており、近代初頭の風俗画としても興味深い。日本橋から保土ヶ谷までの画中には電線と電柱が、またガス燈も各地に描き込まれている。さらに街道を行く旅人も振り分け荷物姿もあれば、洋装にステッキを持った紳士風の男性がいたり、膝栗毛を究める者もあれば、人力車に乗る者もいるというように多種多様な街道風俗が捉えられている。本書は〈案内記〉と言うよりも観賞用の風俗画集とするのが適切かも知れない。

新橋横浜間の鉄道が開業してから五年半後の一八七八年三月に刊行された橋本澄月編『帝国　大日本道中記　一心真成 銅版改正』（辻本九兵衛版）は、江戸時代の冊子体道中記を受け継ぐ七cm×一三cmの横本で、『道中記』と同様に主要街道の行路各々に即し里程と主な宿屋を書き留めている。例えば、「東京ヨリ西京マデ　木曾街道筋」といった行路に沿う記述である。書名が示すとおり銅版画を掲げ、ほぼすべての紙葉の上五分の二に道中の山野等の景色を俯瞰した図を掲げる。すでに新橋横浜間に鉄道が開通しているので、一〇丁ウの鳥瞰図には汽車の姿が小さく描かれる。次丁から「東京ヨリ横浜間汽車時刻表」が、続けて「賃金附表」「電信線賃銭表記」が示される。その後「東京ヨリ北海道及音信料」「帝国大日本郵便表」を掲げるところが近代の道中記たる由縁であろう。鳥瞰図には各地の地名が刻み込まれているが、後に見る明治中葉の〈案内記〉のような名所旧蹟の解説や付言は見られない（これに対し、例えば、江戸

期の吉文字屋次郎兵衛版『諸国海陸道中記』（延享四（一七四七）年）では、鳥瞰図等はないが上段下段をそれぞれ「東海道五三次」「木曽路六九次」に分けて、路程にある史蹟や旧蹟の紹介の他、鳴立沢の西行歌や小夜の中山の夜泣き石伝説等といった歌枕への目配りも丁寧であった）。

本書三二丁オでは「大阪（ママ）市中名所多シ」として、直後に宿屋を五軒並べる。この文言はほぼそのまま同年九月刊の森琴石『大日本道中記』で流用される。続けて、大坂から神戸までを一望のもとに収めた鳥瞰図を配し、神戸大坂間の汽車時刻表と「賃金附表」が配されて次の丁へと続く。本書は一八七二年九月に新橋横浜間に鉄道が開業し、七四年五月に大坂神戸間、七七年一〇月に大阪京都間が開通して京都神戸間が全通するといった鉄道の草創期に刊行された実用本位の〈案内記〉と呼ぶことが出来る。

橋本の編著が刊行された半年後、森琴石編『大日本道中記』（関原利助 出版 一八七八年九月）が刊行される。横浜品川付近の鳥瞰図（横本の上部五分の二ほどの幅）が掲げられた次ページには「東京横浜間汽車時刻表」が、その後から次のページにかけて「右同賃金附表」、そして「電信線賃銭表記」の表が掲げられ、さらに「東京ヨリ北海道及音信料」と「帝国大日本郵便表」が続けて掲載されている等、橋本編『帝国 大日本道中記』の構成と重なるところが多い。

その他のページでは基本的に地名が書き込まれた鳥瞰図の下に各宿駅の名称と里程、そして主な宿屋の名がタテ書きで記されている。

上述の二書のほか、管見に入った比較的初期のものとして、小川新輔編『新版 大日本道中記』（畜善堂（大阪）、一八八六年三月）を挙げておく。本書も江戸期以来の伝統を引き継いだ横本で冒頭に「大日本道中記目録」として「東海道里程」「中仙道里程」等を掲げ、そこから枝分かれして行ける名所への距離が一覧表示される。その後は「道」の宿場間の里程が書き込まれ、各地の山の姿が書き込まれた木版の鳥瞰略地図と、下欄に各々の宿場の宿屋や茶店の名が一、二行で記される。下欄には宿屋のほかに、名古屋近傍の池鯉鮒の「鳴海絞り」や木曽の「おろく櫛」といった名産品、四国では琴平の「金比羅神社」、木曽路では「寝覚の床」等といった名勝の小さな図版も挿入されている。しかし「寝覚の床」ゆかりとされてきた浦島太郎の「浦島がつり石」伝承には触れていない。また、当該図版にはそれを書き込むだけの余白も存しない。

ほかに北海道内の里程も記されるが、基本は大坂（大阪）起点の江戸期以来の街道絵図につらなる書冊で、見返しの木版画は月代もあらわな、脇差し姿の江戸の旅人である。

本格的鉄道時代と〈案内記〉——文学、どうでしょう？

この後、少し間隔は空くが、本格的な鉄道時代の〈案内記〉として登場するのが、上田文斎『内国旅行 日本名所図絵』（青木崇山堂（大阪）、一八八八年～九一年）（図1）である。一八八八年一〇月刊の『巻之一 五畿内之部』以後、四、五ヶ月おきに刊行され、九〇年八月刊の『巻之七 南海道・西海道之部』まで全七巻である。『二 東海道』『三 東海道続 一名 東京及近傍名所独案内』『四 東山道』『五 陸前・陸中・陸奥 北海及北陸道』『六 山陰及山陽道』が刊行

された。七冊の価格は三〇銭から五〇銭。

版型は各巻とも現在の文庫本とほぼ同サイズ。携帯に適したサイズでボール表紙の装丁、各巻一〇〇ページを少し越す小型本である。奥付の定価は上記の通りだが、書冊中のシリーズ予告には二二銭、二五銭といった価格が記されている。

「緒言」に「名所旧蹟は毎紙上欄真正の写真の図画を掲出」とあるとおり、一部例外はあるが、各ページの上半分には当該の土地や世態を描いた銅版画を掲げる。人物が書き込まれている画にはたいてい洋装の人物―西洋人らしき者も少なくない―が描かれており、欧化思潮の中の日本と外人観光客が意識されていたことが分かる。銅版画の下、ページ下半分には漢字を多用した漢文訓読調に近い硬い文体の解説文がある。前掲の『帝国　日本道中記』『新版　大日本道中記』のような絵図を基本としたものに比して文字量が圧倒的に増え、各土地に関する情報が格段に増えている。この時代ゆえ当然とは言えるのだが、送りがなや助詞の活字にはかなりの数の変体仮名が混じっている。総ルビ中にも変体仮名が使われている。

それとのコントラストが際立つのが銅版画の上に記された「THE GATE OF THE MIKADO'S PLACE KYOTO」といった英文のタイトルで、銅版画の描く世界と連動している。多くの銅版画、英文の混在、漢文訓読調、変体仮名、しかも総ルビ、というスタイルから、本書がどのような読者層を想定しているか推測することはなかなか難しい。

以上のシリーズのほか、同著者、版元による『東京名所独案内』という一八九〇年三月刊の書冊もある。表紙に日本語の書名のほか英文タイトルがあるのは巻之一～巻之七と同様だが、『GUIDE BOOK OF TOKIO』とされた本巻の右開きの巻末からは六ページ余の「CITY OF TOKYO」という英文の東京案内が配されている。内容は『巻之三』のなかから、「相模国之部」「武蔵国之部」「安房国之部」「上総国之部」「下総国之部」及び「常陸国之部」を外し、「東京府之記」だけを切り出して構成されたものである。幾葉かの銅版画の配置を変える等、レイアウト上の変化はあるが、基本的には元版の流用である。今風に言えば、いちはやく「インバウンド」に狙いを定めた出版企画ということが当シリーズのほかの巻よりも明瞭に打ち出されている。

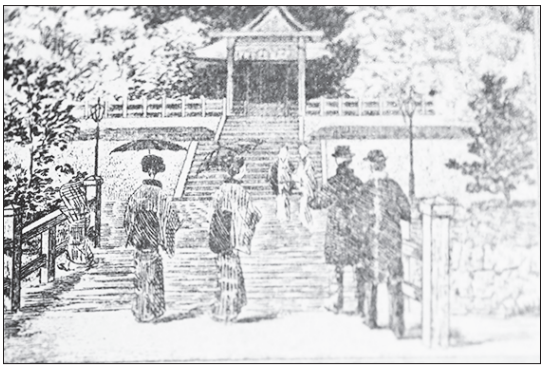

図１『内国旅行　日本名所図絵　東海道続』（嵩文堂、1890年）「鎌倉宮」（護良親王を祀る）銅版画より。西洋人らしき男性の姿が見える［筆者架蔵本］。

特徴的なのはこのシリーズ内での詩歌の扱いである。

『巻之一　五畿内之部』では、京都、奈良のような伝統詩歌のメッカが含まれるにもかかわらず、書冊の説明文内に収められた古歌は僅か六首しかなく、宝塚温泉の記述ではその山水の勝景に心打たれた筆者自身による「湯浴みすと春秋来れど山水のあわれ見あかぬ宝塚かな」の「愚詠」さえ書き込まれている。

こうした「愚詠」を書き込むことと連動したスタンスと言うべきなのだろう、「京都」の項で同志社の建学の精神に感銘を受けた上田は、同志社の「設立趣意書」全文を七ページにわたって引用する。客観的な記述を優先する〈案内記〉との違いが際立つ部分であり、本書の特色を端的に示した箇所と言ってよいだろう。

古歌の引用は、その文学伝統、文化伝統を共有する者にとってしか意味がないと考えるならば、この『巻之一　五畿内之部』での引用の少なさは、そうした文学伝統、文化伝統へのいくらかの反抗を内包していたと言えるかも知れない。また、見方を変えるならば、そうした反抗よりも視界の前面にあったのは、「インバウンド」への配慮だったと捉えた方が適切なのかも知れない（しかし変体仮名等の要素を考慮に入れると、その見方も成り立つとは言い難いようだ）。

ところが、『五畿内』の巻では僅かだった古歌や古詩が、『巻之二　東海道』以降、ページ毎と言ってよいほど数多く引用され、筆者上田文斎による詩歌知識開陳の場と化したかのような記述へと変化する。一言で言えば、伝統的な道中記や名所記のスタイルへ擬似的に回帰しているのである。こうした伝統的な文学表現の世界に足場を据えた、あるいは寄り掛かった、土地と詩歌との密着度の高い記述法は、この『内国旅行　日本名所図絵』の「巻之二」以降、〈案内記〉のひとつの有力な系脈として、かなり長く続くことになる。

鉄道よりも街道？　軸線は江戸のまま

『内国旅行案内　日本名所図絵』シリーズの完成と踵を接して、野崎左文『東海東山　漫遊案内』（博文館、一八九二年七月）が刊行される。二六四ページ。縦一六cm×横一一cmの版である。

経峯居士による漢文の「序」に「抑鉄路闢而険夷変昨之」とあるように鉄道が各地で延伸していくなかで刊行されたにもかかわらず[1]本書は、この後見て行く諸書のような鉄道路線を基軸とする構成ではなく、「東海道の部」「東山の部」という古くからの行政区分、旧街道に準拠した章立てで構成されている。

文学形象について見ると、「東海道の部」「金沢八景」の項では心越禅師や兼好法師の該地との関わりに言及し、心越の「州崎晴嵐」以下「野島夕照」まで金沢八景の七言絶句八首すべてを引用する丁寧さを見せるが、以後は史蹟等の紹介文の中に詩文の引用がこのように多数見られるというわけではない。幾つもの名勝や温泉地を紹介するものの、箱根早川の箇所で「早川の瀬ぎり危ふき船渡り～」という『新選六帖』の歌を引くほかには、万葉集所収歌一首と前群馬県令・万里小路博房の作歌、頼朝が白糸の滝で詠んだ歌、伊香保温泉を詠んだ伊勢の「伊香保なる物聞山の郭公～」（『夫木抄』）、草津温泉「常布瀧」での堯恵法師の「世に知らぬ布ならなくに山姫の～」、多摩川での「多摩川にさらす手作りさらさらに～」の歌、それに「野田の玉川」での能因の「夕されば汐かぜこして陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり」等が見られるにすぎない。本文中に「夫木集以下の撰集に」や「万葉集に伊香保の榛原と詠みしを」等の言及はあるが、能因の歌でも有名な「白河関」は案内記の中でいつの間にか通り過ぎているし、東海道の歌枕「小夜の中山」はその文字さえ見えない。

「凡例」に「余が嘗て実践せし東京近傍の温泉、海水浴場其他避暑遊覧の価ある各地の景況を叙し以て旅客の便覧に供せん」とあるとおり、温泉や海水浴場についての情報が詳しい。温泉は行程や交通手段、宿の名、宿代のほか、泉質分析表（一リットル中の「硫酸ナトリウム」「炭酸マグネシウム」等の含有量を小数点以下四桁まで記す）が示され、薬効についても病名を挙げて詳細に記し、湯治や海水浴が健康維持の方法として注目を浴びてきた時勢とその背景にある科学的知識に基づく情報を提供することに力を入れている。また、記述に疎密はあるが、それぞれの場所で目的地へ向かう旅人の目線に寄り添うように「〇〇橋を渡り、右に折れると」という類の記述に特色を見せている。

「漫遊」に出る人の立場に立った記述が多く、宿について具体的に記し、例えば熱海温泉では宿泊者が食事を賄うのに三つの方法があるとして、それぞれの方法の利害得失について詳しく記している。また鉄道駅で下車して行ける景勝地や名勝については近傍の駅までの鉄道運賃（三等）と時刻も明記されている。宿代のほか、人足賃、駕籠賃についても詳しく記しているのは、これから出掛けようとする人にとっては貴重な情報だと言える。

本書について五井信は前田愛の指摘を引きつつ、本書がガイドブックのベストセラーであったと述べている[2]が、それはこうした記述の実用性と清新さに当時の余暇を楽しむことの出来る階層（余暇時間と可処分所得にゆとりがあり、案内書を読むリテラシーを備えた階層）が引き寄せられたゆえだと考えられる。

しかし、記された情報が詳しければよいかと言えば、必ずしもそうではない。本書の刊行から時間が経てば、そうした価格は変動する可能性も高く、旅先でのトラブルの元ともなりかねないからである。その点、本書がベストセラーとなったということには驚かざるを得ない。実際に漫遊のために使っただけではなく、書斎での読書の楽しみにひたったのだろうか。

ともあれ、本書は過去の文化・文学伝統から一定の距離を置いて執筆された〈案内記〉と言えそうで、「凡例」に「ありふれの案内記にハ往々虚飾の文字を用ひて其実を失ふことあれども此書ハ専ら其の実況実状を写すを旨とし」とある姿勢の現れということになろう。

こうした実用本位そして筆者の実見にもとづく案内記、案内書は、文学との関係の中でもうひとつの系譜を形作って行く。

†

この時期、かつての街道記の系脈を受け継ぎつつ、鉄道の時代との融合を図った出版物も併行して現れている。例えば、山中栄山『大日本道中記　全』（高木和助（東京日本橋）、一八九二年二月）（図2）は木版横本、縦八cm×横一一・八cm。一三二丁（四六ページ）で横長の略地図がページの大半を占める。鉄道路線と街道が直線を主に書き込まれ、四角で囲った「宿駅」名を実線、破線、鉄道線の「線」が繋ぐ表記法の略地図である。北は根室、宗谷等、南は首里まで記されている。宿駅に応じ銀行と郵便局が記載されるほか、陸軍の師団の所在地も表され、江戸期風の版型の中に帝国主義国家日本の軍事的神経系という意味での鉄道線路の性格も暗示されている。

なお、青函海峡には今別（青森）福山（北海道）間に二重破線が引かれ、そこに「海底線路」の文字が見える。「青函トンネル構想」

が戦前からあったことは知られているが、一八九二年九月、青森までの日本鉄道の全線開通から一年も経たない時点で刊行された本書に、その構想の記載がある点は注目に値する（図3）。

この略地図には地名、駅名、里程以外に和歌や俳句等は書き込まれておらず、巻末には新橋福山間の「汽車賃金」表と「鉄道小荷物賃金表」等、旅に関わる〈情報〉を短くまとめてある。実用的なまさに「道中記」である。

野崎左文―「実見」の強み

山中の『大日本道中記』が刊行されたのと同じ年に、三五一ページ立ての野崎左文『全国鉄道　名所案内　上編』（嶽々堂、一八九二年一二月）が刊行される。

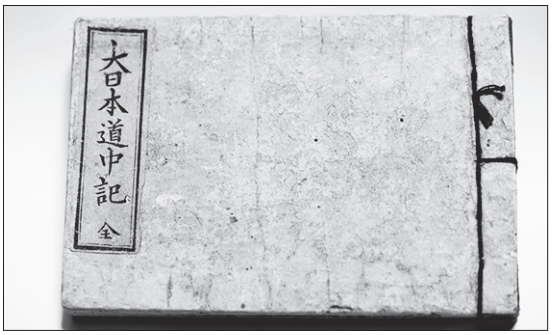

図２『大日本道中記』（高木和助、1892年）表紙。［筆者架蔵本］

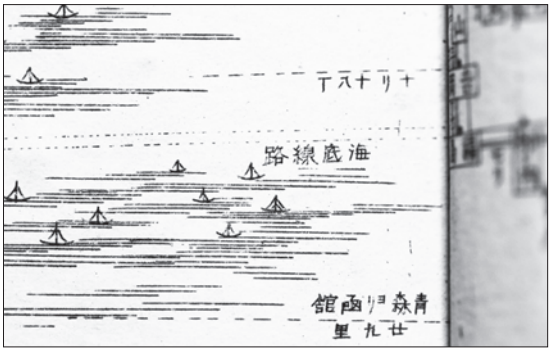

図３　上記『大日本道中記』に記されている「海底線路」。

その「凡例」には

> 鉄道近傍の名勝旧蹟、温泉、海水浴場等の記事を掲げ之に重立たる名所図を挿入し専ら鉄道旅客の漫遊、探勝若くは避暑の手引き草に供せん（略）大凡其地の半までは編者躬ら実見せし景況を写し他の一半は其地の知人、駅長若くは旅店等に現況を問合せ之に最近の編成に係る名所記、案内記又は地図等を参考して著述せし

とあり、前掲した同じ野崎の『東海東山　漫遊案内』（同年七月）のような「海道」に軸線をとる記述法ではなく、「東海鉄道」という章立てで「○○停車場」が下位項目とされ、鉄道基軸の記述である。記述の手法は前作と同じく「編者躬ら実見」した体験をもとにしたとされる。そして、「凡例」に「鉄道近傍の名勝旧蹟、温泉、海水浴場等の記事を掲げ」とあるとおり、名勝旧蹟に関する記載という形で驚くほど古歌や俳句の引用が増やされている。それは、移動のための実用的な案内ではなく「旅客の漫遊、探勝若くは避暑の手引き草に」という、楽しみを基本とした旅行者への配慮に関係しているのだろう。官設鉄道以外の私設鉄道の各路線をも取り上げ、それぞれの景勝地等を取り上げているのは、この頃から各鉄道会社が観光客の誘致に関心を持ち始めたことと対応している。

本書は隅田川ゆかりの万葉歌に始まり、例歌はないが多摩川の万

葉に目をむけ、以下、江の島の自休蔵主と白菊の悲恋にまつわる和歌、「鳴立沢」と西行、伊豆山温泉で右大臣顕光の古々井の森を詠んだ歌、宇都ノ谷峠では『伊勢物語』に言及し、関ヶ原では藤原実方の小倉百人一首入集歌（『後拾遺集』所収）「かくとだにえやは伊吹のさしも草～」を、草津では「野路の玉川」を詠んだ源俊頼の『千載集』所収歌「明日も来む野路の玉川萩越えて～」を、「逢坂関」では清原元輔の歌、高槻の金龍寺で能因の二首、八尾では万葉歌、高田の長谷寺で紀貫之の百人一首入集歌、そして手向山神社を「古へ紅葉の名所」「古歌に名高かりし」と紹介するように多くの名勝旧蹟を和歌や歌物語との関係の中で説明する姿勢は、歌枕的な文学伝統への意識が底在していると見てよいだろう。

『全国鉄道　名所案内　上編』刊行の翌年、野崎は『東海東山畿内山陽　漫遊案内』（博文館、一八九三年七月）を刊行する。前著『東海東山　漫遊案内』の増補版である。三二六ページ。版型は前著と同じ。「凡例」に前著を受け継ぐものと記されている。章立ても街道を基準とするが、「凡例」で言及される「五畿」の部は〈東海道の部〉の後半に紛れ込まされ、なぜか「百草園」の前に配列されている。項目も前著と同じく「○○温泉」「○○海水浴」といった立項法で、「駅」を項目名として立てていない。

宿代やその他賃銭に関することを除く増補加筆の一例としては「松島（瑞巌寺）」項が典型と言える。前著が旅する人間にとっての有用性、実用性重視の観点から記述していたのに対し、本書では仙台・瑞鳳寺の第一四世・釈南山の漢詩を引いて漢詩の規範を受け入れ、その美意識を風景に重ねることで嘱目の松島を美的文学的伝統の中に位置づけようとする姿勢が採られる。五大堂の記述で前著になかった民部卿忠教の歌を引用するのも同質であろう。

新しい文体、視点を構成した左文の『東海東山　漫遊案内』のありようから、少し姿勢が変わり、「大磯海水浴」の項では前著になかった西行の鳴立沢を詠んだ古歌を引き、飯坂温泉では白川楽翁の古歌を引くように変化してはいるが、歌枕を丁寧に拾って行く姿勢に変わったというわけではない。

詩華集としての〈案内記〉

『全国鉄道　名所案内』の下編が刊行されるまでの間に林鐵硯編『全国鉄道賃金名所旧蹟案内』（金川書店（大阪）、一八九四年六月）が刊行される。

東海道線から山陽鉄道等、開通済みの鉄道沿線各地、各々の名所にゆかりの和歌、俳句が数多く引用され、四九四ページの書冊が東海道、山陽、讃岐、伊予、九州、阪堺鉄道、大阪、関西、敦賀線、甲武、日本、両毛、直江津線という開通済みの鉄道毎に区分されている。沿線各地、各々の名所にゆかりの和歌や俳句が数多く引かれ、独自のアンソロジーである。鉄道沿線に即した記述の後には、それぞれ数十ページの東京、京都、大阪の「案内」があり、いずれにも数多くの和歌が引かれる。こうした古歌・名歌の大量の引用には、編者・林が粉本とした先行歌集、名所和歌集の類が存在する筈である。

「序」で編者は昔日の行路難に言及した後、「同人対坐談柄既ニ尽

キ新誌小説亦読ムニ倦ミ人々無聊ニ苦シムノ時」と当代の鉄道行に於ける車内の無聊に触れ、「経過スル所ノ山川其宿泊スル所ノ駅市ニ関スル伝説歴史ヲ知ルヲ得ハ則チ嘱目ノ山河城市祠堂寺観等悉ク旧相識ト変ジ各競フテ状ヲ呈シ我カ前ニ落チ来リ目接シ心解シ其楽ミタルヤ蓋シ少々ナラサルベシ」として、鉄路の周辺の伝説や歴史を知ることの意義を語っている。

「京都案内」では、名所旧蹟や近代施設等について短く記述するなか、「無動寺」から「日吉山王社」、「大原郷」、「寂光院」あたりを紹介する箇所には、紀貫之や式子内親王、西行たちの和歌が一四首も引用される。ここだけが別格なのではなく「東京案内」でも「武蔵野」に触れて和歌一四首と俳句一句が掲げられる等、多くのページに和歌や俳句が散りばめられている。場所によっては、細かな説明が省かれ、十数文字の説明文のあとに古歌が引用されて終わりというものさえある。

「阪堺鉄道」「高師浜」の記述では紀貫之の『古今集』所収歌「おきつ浪たかしの浜のはま松の～」以下、実に一六首が列記される。

ほかに「大阪鉄道」の章では在原業平ゆかりの地に触れた後、「風ふけば沖つ白浪たつた山～」の歌を含む『伊勢物語』の章段も引用されている。歌物語であるとは言え、散文への目配りも怠っていない。

本書刊行の約三年前、一八九一年九月に全線開通した「日本鉄道」は青森停車場でその章を終えるが、謡曲「善知鳥」の背景をなす「善知鳥神社」が取り上げられ、西行の「子を思ふ涙の雨を笠の上にかゝるも侘しやす方の鳥」が本章掉尾を飾っている。

深化する野崎左文

『上編』から三年を経て、野崎左文『全国鉄道　名所案内　下編』（嶽々堂、一八九五年八月）が刊行される。軸線のとり方は上編と同じ。鉄道駅から目的の名所・旧蹟への経路を歩む観光客の目線で建物や構築物をたどる形の記述法である。温泉地では主な宿と宿代を記すが、『東海東山　漫遊案内』の「泉質分析」の数値や含有物質の詳細は省かれた。「格魯兒那篤留謨」（クロロナトリウム $C_2H_2ClNaO_2$）といった化学物質の和名を判読し理解できる読者は限られていただろう。

同じ左文の『東海東山　漫遊案内』の科学的ないし客観的記述とは一線を画すのが、本書の記述の基本線と言えそうだが、しかし当時の技術の粋を集めて完成した碓氷峠の箇所ではアプト式線路の説明に加え、煉瓦橋や隧道の技術的説明を記し、二六本すべてのトンネル長を一覧表で示している。かつて外国人技師付の雇員を経て工部省の技師を務めた野崎城雄（左文）の興味・関心が顔を見せているようである。

そうした近代化への視線が強く示される一方で、例えば「多賀城址」では旧国堺との距離と建立の由来を伝える碑文全文が引用される。

黒磯の停車場近傍の温泉神社の記述では芭蕉の「湯をむすぶ誓もおなじ石清水」と「石の香や夏草あをく露あつし」を引き、続く「殺生石」の箇所では九尾狐の伝承をかなりの字数を使って説明し

ている。そうした文学や芸能に関わる伝承に加え、殺生石とは、砒石または誉石（よせき）という「劇毒質の鉱物」なのだと記し、「硫黄及び酸素を化合し他の諸金属と混和して」石の周囲から発生するのが「亜砒酸瓦斯」だとの科学的記述が補われる点が単なる歌枕の紹介とは異なるスタンスを示す。

さらに北への行を進めて白河に辿り着くと、白河城下の「南湖」近くに位置するかつての結城氏の居城跡「搦山」に建つ「感忠銘」碑の碑文を全文紹介している。さらに続けて「白川の関址」では有名な能因法師の「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白川の関」を紹介する。

郡山停車場と日和田停車場の間に位置する安積山では、その昔、国の神の応対の悪さに機嫌を損ねた葛城王をなだめるために采女が詠んだとされる「あさか山影さへ見ゆる山の井のあさき心はわが思はなくに」の歌が引かれる。そして二本松停車場から行ける「安達ヶ原の古蹟」の項では黒塚にまつわる平兼盛の古歌が引用され、信夫文字摺石を紹介した箇所では、河原左大臣源融の百人一首入集歌「陸奥の信夫もじずり誰ゆゑに～」が引かれる。

仙台に近い「増田停車場（現名取駅）」の項では駅から行ける史蹟として先ず「実方中将の墓」を挙げ、藤原実方の和歌二首を引く。そして「埋木」で知られる名取川については読人不知の「名取川瀬々の埋木あらはれは～」（『古今集』）と寂蓮法師の「有とても逢はぬためしの名とり川～」を引いている。「増田」を取り上げた短い文章の中に四首も和歌を引用するところは、本書『上編』の書きぶりと明らかに異なっている。仮名垣魯文の門に入って文学を志向し、後に『私の見た明治文壇』（一九二七年）を著すことになる野崎の素養が活かされていると言えるだろう。

さらに北上して、仙台「榴ヶ岡」では二首、「宮城野」では古歌二首が引かれ、松島「幽篁浦」の箇所では藤原俊成の「立かへり又も来て見ん松島や～」の和歌が紹介される。この歌の例を含め、本書中に古典歌人の名が記されていても「俊成」「清輔」というように名前のみであることは、この際留意しておきたい。その名のみで分かる文学・文化共同体の一員へ向けた記述だと考えられるからである。

さらに一ノ関町の説明では、かつて磐井の里と呼ばれたことから書き起こし、「諸人は磐井の里にまとゐして～」という『夫木抄』所収歌を引き、前九年の役に触れる中で藤原為家の和歌も引く。

平泉では当然ながら義経ゆかりの地であることを紹介し、前沢停車場では芭蕉の「山にふじ此みちのくの桜かな」が引かれ、不動堂の桜の解説が付される。盛岡を通り越し一戸停車場から北に二キロほど行った「浪打嶺」すなわち「末の松山」に触れて、「年波の末の松山かすむなり～」「見渡せば沖つ潮風吹くなへに～」の二首を引く。

しかし、歌枕の「末の松山」と比定される場所はここだけでなく、[3] むしろ現在の宮城県多賀城市末松山の方が有名である。本書では多賀城址に触れる記述はあるが、多賀の末の松山に関する記述は見えない。先述の林荘太郎編『全国鉄道賃金　名所旧蹟案内』では塩釜停車場の箇所に「末の松山」の項を立て「君を置きて仇し心をわれもたは～」以下五首を引いているのだから、野崎が林編書を見ていないか、見ていても内容を丁寧にたどっては居ないようだと言える。

青森駅へ近づいて「沼崎停車場（現上北町駅）」からほど近い小川

原湖のほとりの「牧場」（故広瀬安任所有）の記述では慈円の「東路の奥の牧なるあら馬を～」（『拾玉集』）を引き、広瀬が「牧老人」と呼ばれたこと等を紹介し、「伯楽たらん人はこの地徒過すべからず」と記す。同じ「沼崎停車場」の近くにあり、歌枕とされる「壷の碑」で「陸奥のいはてしのぶは得ぞしらぬ～」の歌を掲げる。そして「東北鉄道」の終着青森では「善知鳥神社」に即し、謡曲「善知鳥」で知られる伝承に触れている。

青森に到って本書は〈奥羽鉄道〉の章となる。坂上田村麻呂や源義経、金売吉次等への言及が見られるが、他には文学に関わる記述はなく、次章〈水戸鉄道〉へと話頭を転じている。そして、「岩瀬停車場」で「櫻川の桜花」に即して貫之の「いつよりも春辺になれば桜川～」を紹介している。また、「福原停車場」の項で「稲田神社」に言及し、藤原光俊の「千早振この神垣も春立ちぬ～」の和歌を引く。

上州では上毛三碑の一つ多胡之碑の全文を引用し、「佐野船橋の旧蹟」では万葉集所収歌で謡曲「船橋」に展開する「あづまぢの佐野の船橋とりはなし～」を紹介し、磯部温泉近傍では、早くから源頼朝に従い歌舞伎の『盛綱陣屋』、能の『藤戸』に登場する「佐々木盛綱」の墓に触れて「今もなほ城山まつにかゝりけり～」の歌を引く。

以下、碓氷、浅間、上田、戸倉等の記述があるが、いずれにも時代を超えた様々な詩歌の引用と説明があり、新潟で記述を終えている。

新宿から始まる〈甲武鉄道〉の章。国木田独歩が『武蔵野』（一八九八年）で詳述する小金井の桜が「境停車場」の近傍として紹介される。満開時には小金井橋からの眺望が優れているとし、加藤千蔭「聞わたる天の河原か咲花の～」を秀歌として挙げる。

最後の章〈青梅鉄道〉の「羽村停車場」の項で多摩川上水の分岐「羽村堰」に触れた後、水門の近くに建つ「水道碑」の全文をかなりの長さで掲げている。

旅行者の増加とブックメーカー野崎左文

左文著が時を置かずに増補再刊されたことなどから推測できるように、この時期、鉄道での旅行者が徐々に増えていった。それは様々な数字から示すことが出来るが、そうした旅客の需要に応えて／見越して、柳の下を狙ったような書冊も登場する。松本謙堂編『旅行錦嚢　日本漫遊案内』（飯田信文堂、一八九六年五月）はその一例である。版型は左文著とまったく同じ。一〇〇葉を超す写真を収め、二六九ページの三分の一を写真が占める。「凡例」に「主として漫遊者の羅針盤たり嚮導者たらしめんが為めなり故に必要欠く可らざることは務めて網羅集載する」とあって〈大日本帝国〉の章以降、〈畿内〉〈北海道〉〈台湾〉と〈付録〉の章に至る。

それぞれの土地について鉄道運賃、人力車賃等が詳しく記され、川の全長や山の標高は数値を詳記するが、名産品は名を羅列するのみ。古蹟も名称を挙げるだけで、経路や周辺の街のたたずまい等は省略される。それぞれの場所の文学的伝統等の記載はまったく見られないため、観光者にはほぼ役に立たない。運賃が改訂されればた

だの紙くずとなるだけの書冊である。

名所古蹟の記述が粗略であるのに反し、大阪の某病院の診察料、入院料等三〇ページを越えて記される。他の土地についてはそうした記事はなく全くバランスを失している。

一方、野崎左文は時流に乗って『東海東山畿内山陽　漫遊案内』から約五年後、次なる〈案内記〉『日本全国鉄道　名所案内　関西之部』（一八九八年四月）と『同　関東之部』（同年五月）を春祥堂から刊行する。

両書ともページノンブルなし。書名に「鉄道」の語が入るとおり、鉄道路線を軸線として記述が進められるが、停車場に即した以外の景勝地、史蹟についての記述も併存している。

ここでは『関東之部』だけを取り上げる。東北鉄道以下、本編で触れる鉄道路線についての概観と哩程を記す「鉄道総記」の章から始まって、「東北鉄道之部」として北へ向かう。那須温泉神社で芭蕉の二句を引き、殺生石の項で科学的記述を見せつつ文学・芸能へ言及する等、同人の『全国鉄道　名所案内　下編』（一八九五年）の記述とほとんどが重なる。ページ番号の記載がないだけで組版もまったく同一で、詳述に値しない。（これは『関西之部』でも同様で、横浜のような大都市の記述でも人口の数値が『全国鉄道　名所案内　上編』（一八九五）と三年後の『関西之部』で全く同じという事実を挙げるだけで充分であろう。）

東北鉄道を終わって『全国鉄道　名所案内　下編』では「奥羽鉄道」へ記述は移るが、本書は田端から始まる「陸前　浜街道線」の章がページを換えて始まり、以下、水戸、両毛、富岡、北陸、奥羽、太田、総武、房総、成田、甲武、川越各鉄道の記述が続く。「奥羽鉄道」の章は、『全国鉄道　名所案内　下編』では「里」「町」制だった距離記述が鉄道に即す形で「哩（マイル）」「鎖（チェーン）」と改められる等、若干の記述の修整はあるものの、基本的に『全国鉄道　名所案内　下編』の文章が流用されている。

本書はのちに、後述する同じ野崎『日本海陸漫遊の栞　東部』（六々会、一九〇三年）でかなりの大量の紙型が流用され、同一の文章（疑問の箇所を含む）が多々見出せる。ブック・メーカー野崎左文の腕の見せ所だったのか、左文著の人気にあやかった出版だったのか、どちらとも言えそうではある。ただし、『日本海陸漫遊の栞』では航路の増補を含め、かなりの箇所に増ページが施される。

徒歩旅行の残照と〈案内記〉の諸相

再版ではなく増補版が出されるなか、鉄道によって旅行の条件が整備されたのを逆手に取る歌原恒『旅枕　漫遊内案（ママ）』（山下倶楽部（東京）、一八九八年六月）という〈案内〉と銘打った徒歩旅行記が登場してくる。九六ページ＋三三ページの小型本。東京から八王子を経て鈴鹿に到る「私」の旅日記である。

途中、自作句を掲げ、末尾には西行の「鈴鹿山うきよをよそに振りすてゝ～」の歌を置く。七ページ分の広告を挟んで、後半に名所・名山を項目ごとに記す案内が三十ページほどあるが、極めて大括りで〈東山道之部〉で「矢祭奇渓（磐城）」から四項目目には「蔵王山」へ飛ぶという設えである。あいだに旅館の広告数葉を挿

み、二つ目の括りに〈東海道之部〉を置く。巻頭に「草鞋は旅人の甲冑なり」との曲亭馬琴の言を置き、掉尾に西行の鈴鹿山の歌を引くように、徒歩による旅を懐旧的に実現して見せた記録と言える。本書刊行の一八九八年前後には日本各地の主要鉄道幹線が開通し終えており、徒歩旅行が過去のものとなりつつあった時代である。

かつて前田愛が近代ツーリズムに関連づけて論じた[4]泉鏡花『高野聖』は汽車のなかで出会った旅僧から、若い日に飛騨山中を徒歩で山越えした際の怪異体験を聞かされる話であり、鉄道旅行と徒歩旅行とを作品の基底に据えた一九〇〇年の小説である。

そうした時期、冒頭に志賀重昂の「序」を置く藤野彦次郎『日本漫遊要覧　上之巻』（東京画報社、一八九九年四月）上之巻＝菊判、二六一ページ、下之巻＝菊判、二九二ページ（九九年九月）が刊行される。藤野はその住所から判断して『明治肖像録』（一八九八年）の編者・田中彦次郎と同一人と見られるが、経歴等は未詳である。

東京は「区」に分かち、宿の住所と名称も一覧可能な形にまとめているが、交通機関の記述が希薄なため、旅行者に使い易かったかどうかかなり疑問である。

各鉄道路線に沿い、駅を起点として各地の社寺、史蹟、景勝地等を項目毎に列挙する。全体に簡潔な説明が多いが、社寺の建立由来、祭神、本尊の記述の他、伝承にも触れている。

文学関連で言えば、景勝地、史蹟では、漢詩の引用が突出して多い。返り点はあるが読み下し文はなく、相当の漢語力がないと読めないだろう。和歌俳句の引用も少なくないが、ほぼ漢詩の後に置かれている。和歌は歌枕に即してと言うより、取り上げる土地の風景を詠じたものを選んでいる。

「金沢八景」は心越禅師による七絶で始まって、沢庵の「朝夕に浪よせ来ぬる烏帽子嶋～」の歌を引き、「称名寺」で為相の和歌と宗牧の発句、「鴫立沢」では西行歌への言及はあるものの、箱根では佐野常民、依田学海ほか五名の七絶七首が列記されて、三条実美ら五名の和歌七首、其角の俳句一句を文字量で圧倒している。以下、菅茶山、石川丈山、山崎闇斎、森春濤等の漢詩が次々と登場する。

このように漢詩脈が表にせり出しているなか、「小夜の中山」は言及のみ、「稲葉山」では藤原定家、在原行平の二首を引く。琵琶湖に至って芭蕉の三句が引かれるが、京都に入ると嵐山で七絶五首、市内で春濤の七絶四首等、やはり漢詩への傾斜が強い。

東北に目を移すと、「白河関」で能因歌「都をば霞と共に立ちしかど～」を引き、「野田の玉川」で同じ能因の「夕されば汐かぜこしてみちのくの～」を引くものの、松島に至ると、漢詩八首、和歌五首、俳諧二句とやはり漢詩が優勢である。

一戸近傍の「末の松山」では大槻磐渓の七絶を引き、清輔、宣長らの和歌四首を引用している。

以下、常磐線の「大洗海水浴」で七絶三首、「勿来」では八幡太郎義家が馬を留めて詠んだ和歌を引き、歌枕への配慮も示しているが、引用詩歌の基本が漢詩という姿勢は変わらず、他の線区に移っても、「伊香保温泉」七律一首、七絶三首。「碓氷峠」五律二首といった具合である。

浅間温泉では珍しく和歌が三首引かれるが、江戸中期の国学者・村田春海、本書刊行の数年前に没した国学者・近藤芳樹、本書刊行

時には存命の歌人・高崎正風の作歌であり、姨捨山で「田毎の月」に言及しているものの、引かれる歌は真淵、仁斎に加え、前出の近藤芳樹という具合である。下之巻でも漢詩重視、国学の世界への傾斜は同様である。

藤野『日本漫遊要覧　上之巻』刊行の翌月、福田初次郎『全国汽車　鉄道旅行案内』（一八九九年五月）が出版される。一枚物で、上段、下段に伊香保、善光寺、吉野、高野山、錦帯橋等といった名所の小さな銅版画を掲げ、中段には本州を主として、北海道、四国、九州の都市や鉄道駅を既設路線で結ぶ周密な略地図を配す。三段に区分された絵図である。駅間毎の里程を記すほか、県庁所在地の欄に人口と東京からの距離ほかが付記される。文章は皆無であり、まったく実用本位、あるいは行程確認だけに役立つ「旅行案内」である。時刻や賃銭の記載がないだけ、汎用性は高いと言える。

家庭への浸透、大衆受けへの志向

このように、鉄道が全国に路線を広げる過程で登場した〈案内記〉は記述スタイルから大きく三つに分けられよう。

①現地を訪れた人間の目線を優先し（科学的知識等の要素等を取り込みながら）つつ、文学的伝統も若干意識するものの、距離を置いて名勝等を紹介するもの。

②過去の文学的・文化的伝統を配慮し、歌枕的な規範や漢詩文の規範に寄り添って名勝旧蹟を紹介するもの。

③実用面を重視し名勝・古蹟等への説明を省いたもの。

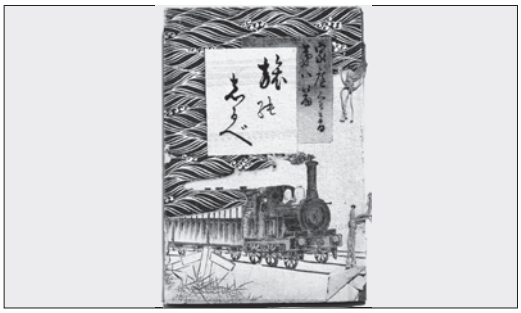

図４『家庭全書　旅のしるべ』（尚文堂、1900 年）表紙。［筆者架蔵本］

図５　上記『家庭全書　旅のしるべ』の中の口絵。「健全な」家族の旅の車中だろうか。

こうした流れの中に、菊判二三七ページの大判で、日清戦争後の下関条約によって割譲させた台湾を含む交通路を記した「日本全図」附きの的場樗渓『家庭全書　第八編　旅のしるべ』（尚文堂、一九〇〇年一一月）（図4、図5）が出現する。戦争で広がった日本の版図を広く知らせる要素を持ちつつ、同時代の文学界に流行した「家庭小説」（＝「健全な」家庭を描き、〈光明小説〉とも）の「家庭」像とも連関する出版企画と言うべき「家庭全書」[5]シリーズの一冊である。

本文では「家庭全書」の一冊という意識を感じさせる樗渓の「旅行」概説が記され、「鼇頭（ごうとう）」欄に「汽車の昇降」「旅客携帯品一時預入れの手続」「汽車賃と年齢」等、鉄道利用の細かな注意事項や情報が記される。そのなかの「旅行の機関」では汽車汽船から人力車、自

転車を交通機関として挙げている。最末尾に「駕また排斥すべきにあらざるなり」とあるが、本書刊行の十二年後に建設を開始した岩手軽便鉄道が一九一四年に花巻仙人峠間で開通したとは言え、徒歩を避けるなら仙人峠は索道（空中ケーブル）か駕籠で越すほかなかったことを思えば、この時点で、各地に駕籠業者が存していたことは少しも不思議ではない。前時代的言及とは言えないのである。[6]

三九ページの鼇頭からは「賞心楽事」とのくくりで「名勝旧蹟その他の詩歌もしくは俳句に入りしものを集めて、旅客の羈情を慰め傍ら以て新詠を誘引せんとす」として、下欄の本文と対応する形でそれぞれの土地に所縁の古歌、俳諧を掲出している。もちろん、和歌俳句が数多いが、目立つのは漢文、漢詩の類である。版型から見て、旅行に携帯するものというより自宅に置いて読書と空想の紀行を楽しむのに向いている書冊と言えるだろう。「よき家庭」の架蔵書となることを想定したように見える。

†

多様な読者の出現を想定し、これまでにない〈案内記〉を目指す動きと見られるものが、金尾文淵堂編輯局編『避暑漫遊　旅行案内』（一九〇一年九月）。A5判、一九七ページ。金尾文淵堂は『日本及日本人』や第二次『早稲田文学』の発行所となる等明治大正期の出版界に存在感を示した版元である。

本書は冒頭に『国民新聞』記事「汽車の乗客」を置く。切符の購入や車内マナー等々、注意事項を縷々説いて国民生活の向上を訴える文章である。それはそのまま、約九〇ページにわたる概説部分を側面から支える要素となっている。

総ルビの本文は「旅行の勧め」が冒頭の章。続いて「旅行の準備」の章では着て行く衣服や何が必要な持ち物かを記す。「西洋剃刀、歯磨、楊枝、石鹸」は分かるとして「ピストル」まで記して「自分に入用なものを撰んで一つの旅行カバンへ御詰めなさい」という冗句のスタイルが本書の基本スタンスと言える。

携行する書籍の準備を勧めた箇所には

汽車の中とか船の中とか乃至は宿へ着いてから、ツイ読むものがないため飛んだ退屈をする事があります、（略）本を定めて置いて旅行の傍勉強をもする方がいゝでしよう、併しそれが面倒と云ふなら薄田泣菫の『暮笛集』とか浩々歌客の『詩国小観』とか云ふものを持て行つて月明かなる波打際、木蔭涼しき山の峡あたりで、静かに吟唱したなら蓋し羽化登仙の快があるだらうと思ひます。

とあるのは、W・シヴェルブシュが『鉄道旅行の歴史』で車中の無聊に触れた箇所を思い起こさせるが、二著はいずれも本書の版元金尾文淵堂の刊行書である。さり気ない紙上宣伝とお巫山戯である。

「旅中の心得」では発車時刻に間に合う用意、切符の買い方等乗車船時の注意事項が詳しく記される。以下、「旅中の衛生」「汽車と汽船」等「です・ます」調の文体で縷々諸注意が綴られてゆく。

「郵便と電信」の章は打って変わって公的な文書を引き写したとしか見えない「～すべし」で終わる文語調の固いスタイルとなり、郵便や電信の規則や利用法の説明が続く。本の体裁を整えるための

紙数稼ぎと言われても致し方ない感じさえするが、本書には「有馬」や「長良川」「橋立」等を画材とした綴じ込み絵葉書が附されていて、旅先での利用を慫慂している。そこから考えれば、郵便規則を詳述するのもそれなりに必要な事柄ではある。

延々とこうした旅行「心得」が続いたすえ、八九ページ目にしてようやく「近畿諸鉄道」と題した「名所案内」が始まる。やわらかな語り口調の文体で広範な読者に受け入れやすいようにという意識の表れだと考えられる。

「関西鉄道」から始まり「大阪（難波）」が冒頭に据えられて、この時期までに定番となっていた、駅を起点として展開する〈案内記〉が始まる。

大阪市の概要、主な旅館を記述し、食事処を列挙したあと、寺社、行楽地、名所を、その来歴、由緒に手短に触れながら簡単に紹介している。「露の天神」では「露と散る涙に袖は朽ちにけり～」という筑紫へ左遷された際の菅原道真の歌を紹介する。「柏原」「道明寺天神」の項でも道真に触れ、叔母との別れを惜しんだ「鳴けばこそ別もいそげ鶏の音の～」が引かれている。

以下、「賀茂」では藤原兼輔の百人一首入集歌「みかの原わきて流るゝ泉川～」が引かれ、和泉式部の墓所とされる「新木津」近傍の地の紹介も挟みながら、楠木正行討死の地「四条畷」や、大阪城の花と歌われた木村重成の討死の場所にも触れる（「徳庵」）等、世間の人々のよく知る伝承、口碑に細かく目配りをしている。「賀茂大阪間」の記述で「上野」「鍵屋辻」を歌舞伎「伊賀越道中双六」を引き合いにして記すあたりには、本書の想定する読者層が彷彿とするようである。

こうした文学・文化への視線は、「関の地蔵」をとり上げて行基菩薩が開基であるとの伝承を記したうえで、一休が「小便をしかけたとか云ふ談」に触れるあたりにも、本書の大衆的なスタンスを見て取ることが出来る。その裏返しだろうか、「紀和鉄道」で「和歌浦」に触れるが、該地に関わる和歌についての記述は一切無い。

「南海鉄道」「浜寺」の冒頭に「音に聞く高師の浜の仇波は～」と百人一首入集歌を作者名なしで唐突に引き、「大津」では「土佐日記にある小津の泊と云ふのは此処の事」と紹介するが、それらの事績を掘り下げて見せる姿勢は希薄である。繰り返すが、そうした表れは言い換えれば（冒頭の過剰とも言える親切な「旅行の心得」に見られ、そしてさきほどの一休の小便に見られるのと同様に）、庶民的な「案内記」を目指すスタンスとなっていると言える。「宇治」の項で「橋姫社」に触れた箇所での「旧宇治橋の南端にありまして恋の神様だそうです失恋の人は行つて祈誓を籠めたら宜う御座んしよう」という語り口を示せば、説明の必要はあるまい。

こうして近畿一円を鉄道を基軸にめぐってきた末に「奈良鉄道京都鉄道（福井京都間／京都薗部間）」で「京都」までたどり着いた記述は、「（京都の）名所旧蹟は数限りもない程ありますが一々説明してゐる訳には行きませんから」との釈明の後、名所旧蹟の名前を羅列して終わりを迎える。各所ゆかりの文学的事績や古歌俳諧に触れることは一切無い。

なお、温泉地に関する記述ではその効能にも触れるというように、利用者の具体的な関心にも目配りは怠っていない。

本書後半は「東海道鉄道」の章となり、「官設鉄道」駅を主軸に私鉄路線を加えた記述となっている。路線にしたがって「神奈川」に到り「浦島寺」を取り上げて、「浦島太郎竜宮より箱根山にて玉手箱を開いて」との伝承にも筆を費やし、庶民的なスタンスは近畿の場合と変化していない。「大磯」で「鴫立沢」で西行堂を挙げて「こゝろなき身にもあはれは～」の歌を引き、「田子の浦」では「田子の浦にかすみもながく見ゆるひの～」の歌を作者名（＝大中臣能宣）に触れずに引用している。文学的伝統の地平を踏まえる姿勢と言うより、一応触れておくという程度のスタンスに見える。ところが「興津」では「和名抄に島津興津又は沖津等書いた処でして」と突如くだけた口調で『和名抄』を引き合いに出したりするなど、その記述は融通無碍と言うほかない。

多くの詩歌を引用する他の〈案内記〉と異なる執筆・編集の姿勢は明瞭で、一つの文化的位相（この場合「文学」）に固執しないということになるだろう。よい意味でのそのノンシャランさは「焼津」の項で最初から「神皇正統記に曰わく」と語り出し、草薙剣の由来譚を五行にわたって記すありようにも示されている。皇室に関わる事柄ゆえに詳しく書いたとも言えようが、それと較べれば「近畿」での大和等の記述は如何にもあっさりしているのである。「袋井」の項で、「秋葉山」を見るべき場所として紹介し、「先年登山した折某新聞へ寄せた葉書を左に」として、一八行に及ぶ自分の「葉書（？）」文面を引いてみせるのも、本書の〈自在さ〉だろう。「苅谷」では「杜若のあつた八つ橋の古蹟」を指摘して『伊勢物語』の当該の章段を丸ごと引用している。

「総武鉄道成田鉄道及房総鉄道」の章は東京から始まるが、市川では「真間の継橋」の語は見えるものの真間の手児奈の歌に触れることはない。あっさりと終点の「大原」へたどり着く。

「山陽鉄道」「明石」では「松風村雨」を項として立てて、流謫の在原行平が蜑の子に宿を尋ねた事績に触れる。当該の和歌を引き、松風村雨の墓の存在に触れる。「明石」では「人丸神社」を取り上げ、「ほのほのと明石の浦の朝霧に～」の歌を生国石見から京へ向かう途次に人麿が詠んだ歌だと紹介している。また「休天神」では左遷される途中の菅原道真を迎えた駅の長が菅公の不遇を悲しんだ時に、道真が詠んだ「駅長無驚時変改　一栄一落是春秋」の紹介がある。

「中国鉄道」「津山」では「院庄」を取り上げているものの、児島高徳の名前と桜樹の語は出すだけで、「天勾践を空しゅうすること莫れ時に范蠡無きにしも非ず」の言葉を引くことはない。『太平記』のこの文言を取り込んだ小学唱歌「児島高徳」が『尋常小学唱歌（二八）』に収載されるのが一九一四年六月になってという事情が絡んでいるだろう。

近畿地方を軸に西日本に手厚い本書ではあるが、さまざまの名所、景勝地の類へ行き着くための鉄道駅からの里程や交通機関に関する記述はあっさりとしたもので、それぞれの場所に行って体当たりで探し当てるほかない程度の大雑把な記述に止まっている。

この『避暑漫遊　旅行案内』のような大衆受けを狙ったとも言える〈案内記〉が刊行される背景には、やはり広範な人々による旅行が行われるようになってきた状況があっただろう。柳田国男が後に『明治大正史・世相篇』（一九三一年）所収の「汽車の巡礼本意」で

「汽車が通じたから出て来たといふ人」と呼んだ人もこの時期から増えてきたと考えられる。

（以下続稿）

付記

本稿は昭和文学会『昭和文学研究』七五集（二〇一七年九月）掲載の拙稿「『ツーリズム』のゆくえ　歌枕的文化と『案内記』」の中心部分「〈案内記〉と歌枕的伝統」の節の原型に加筆修整を加えたものである。

『昭和文学研究』の「ツーリズムと文学　特集」に編集委員会の需めに応じて書いた初稿は、明治初期から昭和初頭までの〈案内記〉に言及した原型部分だけで四百字詰原稿用紙百枚をはるかに超える文字量となってしまった。学会誌掲載稿は、これを大幅に削ったものである（それでも指定紙数を超えて、編集委員長の日高佳紀先生（奈良教育大学）には大変ご迷惑をお掛けした）。

本稿と学会誌掲載稿とのあいだにいささかの重複はあるが、削除部分を大幅に復活させてあり、学会誌稿ではことば足らずで終わった箇所を補い、それぞれの〈案内記〉の記述の紹介と分析をいくらか補えているのではないかと思う。

――注

（1）一八八九年七月東海道線、新橋神戸間全通。さらに本書刊行の九二年七月には三原（山陽鉄道）まで延伸。東北線（日本鉄道。上野青森間）は九一年九月に全通。北陸線は高崎直江津間の碓氷峠が障壁となって全通していなかった。九州、北海道では幾ばくかの路線が運行を始めていた。

（2）五井信「書を持て、旅に出よう　明治三〇年代の旅と〈ガイドブック〉〈紀行文〉」（『日本近代文学』六三集、二〇〇〇年一〇月）33ページ。

（3）平凡社『日本歴史地名大系　宮城県』「末の松山」項を引く。「江戸時代には各藩により領内の名所旧跡を定着整備させようとする政策がとられてくる。その結果「みちのく」に「末の松山」が四ヵ所も生れるという現象を生じた。（一）現福島県いわき市説、（二）現岩手県二戸市説、（三）現桃生郡河南町須江説、（四）現多賀城市八幡説である」。二戸停車場近傍とされる「末の松山」は（二）にあたる。

（4）前田愛「『高野聖』――旅人のものがたり」（『國文學　解釈と教材の研究』一九七三年七月）

（5）「家庭全書」は第一編『明治礼式』から第一二編『家庭の教育』まで全一二冊のシリーズである。

（6）一九三六年七月下旬に花巻の医師佐藤隆房が撮った動画『懐かしの岩手軽便鉄道』に仙人峠を駕籠で越す人々が映っている。

＊なお、本稿でとりあげた諸書のうち、原本では角書きで表記されているタイトルや、旧字、異体字が使われているものも、すべて角書きは一行に改め、新字表記とした。